

## タイトル 死への先駆とリルケの墓碑銘

副題 誰もが眠る誰のものでもない眠り

氏名 串田純一 (早稲田大学ほか非常勤講師)

『存在と時間』によると、解釈というものは一般に先持（所与の主題）の全体性を前もって求める。そしてこの書物自体が私たち現存在のあり方の解釈として始まっており、当の現存在の実存は「最も固有で、係累がなく、追い越すことのできない、常に確実だが定まっていない可能性」としての死の外に出ることはありえない以上、その死へと「先駆」して現存在の全体存在可能性を確保することが、方法的に要請されることになる。

こうしたハイデガーの考えは今日に至るまで様々な議論を呼び続けているが、とりわけ多くの批判を集めてきたのが、死の係累のなさ〔unbezüglichkeit〕の以下のような性格づけである。「死は現存在を単独のものとして要求する。先駆において理解された死の係累のなさは、現存在を現存在自身へと単独化するのだ。この単独化は、「現」を実存のために開示する一つの仕方なのであり、それが露わにするのは、最も固有な存在しうることへと関わり行くことが問題であるときには、配慮的に気遣われたものもとの全ての存在も、他者たちと共にあるどんな共存在も、何の役にも立たないということである」(S. 263)。レーヴィットやレヴィナスからブランショ、クリッチリーなどにまで至る多くの論者が、こうした死における共同存在の排除に疑義を呈してきた。ところがハイデガーはまた他方で、「しかし係累のない可能性として死が単独化するのとはただひたすら、追い越すことのできない可能性である死が、共同存在としての現存在に他者たちの存在しうることを理解させるためなのである」(S. 264)とも述べ、死への先駆によってこそ本来的な共同性が可能となる、という展望も示している。これらを事態は、どのようにすれば整合的に理解できるのであろうか。

本発表では、最も固有な存在可能性は個々の現存在にとってそのつど一回的なものだという点も顧慮しつつ、共同体の内における死への特異な実存の態度—それが先駆と同一視しうるかはとりあえず留保して—の実例として、自作の墓碑銘、とりわけ詩人 R・M・リルケのそれ (Rose, oh reiner Widerspruch, Lust / Niemandes Schlaf zu sein unter soviet/Lidern.) を読み解くことで、上記の問いに一つの見通しを与えることを試みる。一方のリルケ研究の側から見ても、おのれに固有な死を巡る彼の詩作とハイデガーの思考の近さは早くから指摘されてきたにもかかわらず、この墓碑銘を先駆や決意性の観点から問題にした論はほとんど見当たらない、という現状に多少の寄与を加えることができよう。

手順としては、ここまでのような問題設定を序論で行った上で、まず墓および墓碑銘もまた一種の「手許的・道具的存在者〔das Zuhandene〕」にほかならないということを確認し、その「意義」を記述・解釈する。形式的に言う墓碑銘は、ニグループの人間それぞれが二つの「世界」において存在する仕方に関して、何事かを語る。すなわち、故人と未だ生きている者たちが各々、「この世」と「あの世」においてどう存在するか、である。これら都合四つの視点の重量配分には様々なパターンがあり、時代的傾向も見られる。例えば、古代ギリシア・ローマでは故人の生前の功績の確立とその現世における模範化が、またキリスト教的中世においては此岸を軽視し死後の救いを追求することへの誘いが、優勢となる。

第2節ではこうした一般的な機能を背景として、問題の碑銘（「薔薇、ああ純粋な矛盾、悦び、／これほど多くの瞼の下で誰の眠りでも／ないという。」）が発揮しうる際立った働きが示される（こ

の際、同じく詩人自身による墓碑銘として J・キーツの事例 (Here lies one whose name was written in water) などが対照項となりうる)。すなわち、墓を訪れたり墓碑銘を読んだりする者は多かれ少なかれ、既在となった被葬者の実存を現在の観点から規定しようとするのであるが、この銘はそれにいわば先回りをして、理解と解釈の視線を私たち自身の現存在へと折り返させるのである。これを読もうとするような者であれば、リルケが今なお時代を代表する最も重要な詩人の一人であることは既によく知っているだろう。ところが、それほどの仕事を残した人間の眠りですら「誰のものでもない〔Niemandes〕」のである。この言葉を前にして私たちは、歴史意識を欠いた「これほど多く」いる日常的な世人〔das Man〕としての自らの企投の有限性へと投げ返されざるをえない。そしてそれは彼岸に関してはとくに何も語っていないように見える。

例えばサルトルは『存在と無』において、死者の生を自由に意味付ける生者の一方的な暴力の「勝利」について語ったが (p. 624. ff)、実のところその意味付け自身もまた、当の生者が死ねばより後の人間の為すがままとなるのであって、この再帰的・反復的な構造にまで彼は考えを及ぼすべきだっただろう。またブランショが指摘しているように、リルケ自身、『マルテの手記』や前期の詩では「主よ、すべての人間に、彼自らの死を与えよ」(時禱詩集) といったことを書いていたのであるが、おそらく詩人は徐々に、記述可能であるような「固有の死」もまた結局は高々「固有の生」に留まるということに気付いたのだろう。むしろ、世間的な他者による理解と意味づけを最も必要としない係累を欠いた言葉こそ—時代と運命を共にすることがないゆえに—最も永く読まれ続けることができるのである。こうした事態が「純粋な矛盾」の、少なくとも一面をなす。そしてそこにある悦び〔Lust〕は、「単独化されて存在しうることへ当面させるこの醒め切った不安には、こうした可能性にふさわしい身構えの整った歓び〔Freude〕が伴っている」(S. 310) という『存在と時間』の魅惑的な箇所と無関係ではありえないだろう。

ただし最後に私たちは、この類例のない碑銘の限界をも指摘しておかねばならない。まず、或る言葉が理解を投げ返すためにはそもそも他者の企投をまず引き寄せなければならず、これは結局のところ社会的評価が確立された芸術家であるという被葬者の特権性がなせる技である（「現存在はたいてい未完成のまま終わるか、憔悴したり崩壊し切ったりして終わる」〔S. 244〕）。また、この言葉は生前に十分準備されたものであり、残された人々の側もその意図に反することなく現に墓と碑銘を立てて保っているという、或る偶然的な幸運に恵まれている（そしてそれへの信頼はおそらく「薔薇」が形象化しているものの一つである）。ここで成り立っているものは一つの貴重な範例ではあっても、誰もがまねぶことのできる類例とはなりえない。言い換えるとリルケの墓碑銘は、死の「最も固有で、係累がなく、追い越しえない」という側面を美しく反映してこちら側を照らし出すが、残る「常に確実だがいつであるかは定まっていない」という契機には十分呼応しているわけでない、ということである。仮にこれらをも汲み取ろうとすれば、その格率は「君の言葉が常に同時に墓碑銘でもありうるように語れ」とでもいうことにでもなるのだろうか。しかし果たしてそれは、そもそも試みることだけでも可能なことなのであろうか。本発表はとりあえずこうした問いを開いておくことにしたい。